

第3回小牧市健康・支え合い循環推進会議 議事要旨

日 時	令和5年2月20日(月) 13時30分から15時30分まで
場 所	小牧市役所 本庁舎6階 601会議室
出席者	<p>【委員】</p> <p>柴田 謙治 金城学院大学 教授 伊藤 博美 椛山女学園大学 教授 加藤 武志 中京大学 講師/まち楽房有限会社 代表取締役 伊藤 大介 日本福祉大学 助教 田中 秀治 小牧市社会福祉協議会 在宅福祉課長 関 哲雄 こまき市民活動ネットワーク 事務局長</p> <p>【市政戦略本部 本部長】</p> <p>山下 史守朗 小牧市長</p> <p>【事務局】</p> <p>入江 慎介 健康生きがい支え合い推進部長 江口 幸全 健康生きがい支え合い推進部次長 永井 政栄 健康生きがい推進課長 倉知 昌孝 支え合い協働推進課長 岩下 貴洋 健康生きがい推進課係長 岡田 洋平 支え合い協働推進課係長 丹羽 勇人 支え合い協働推進課主事</p>
傍聴者	0名
配布資料	資料1 第3回会議資料 参考資料1 調査結果(資料集)

主な内容

<p>1. 開会</p> <p>2. 議題</p> <p>(1) 第2回推進会議の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事務局による資料説明(資料1) ・会長報告書の構成案の説明 <p>○柴田会長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の振り返りはよろしいでしょうか。 ・とりまとめに向けて、構成案を提案したい。3月20日はこの構成案をもとにレジユメを作成して検討してはいかがだろうか。この構成を参考に、事務局で検討いただきたい。
--

○事務局

- ・先ほど会長からもあった通り、本会議は全4回で第4回会議は来月3月20日を予定している。ここで議論の取りまとめ、報告書の素案の方を見ていただき、本会議の報告書案について終了後の3月下旬頃、委員の皆様からメールで最終の意見聴取をさせていただきたい。
- ・報告書については年度末めどに完成、共有したいと考えている。

○市長挨拶

- ・施策の柱の1つとして、人生100年時代となる中、高齢化はネガティブなイメージがある。これからさらに高齢化が進んでいく中で、健康で長生きすることが重要である。少子高齢化の中、若い人たちが支えるのは限界があり、社会的な負担感を考えると、皆さんが元気になって、主役になって支え合っていく、活力があり、幸せな高齢社会を作っていくために、健康と支え合いの循環に取り組んできた。市民の皆さんと方向性を共有して、参加を高めていきたい。
- ・地域のつながりを感じながら、お互い様の意識をみんなが持てるとよい。ちょっとした参加できること、SNSで「いいね」を押すなど、細くてもつながっていることに向けて、何かできないかと思っている。
- ・新型コロナウイルス感染症により、地域のつながりや支え合いは大きな影響を受けてしまった。皆様からのご提案いただき、お知恵をいただきながら、考えていきたい。

(2) アンケート等の調査結果

○柴田会長

- ・クロス集計について、有意水準の検定を検討いただきたい。

○伊藤大介委員

- ・クロス集計は、サンプルサイズに気を付ければ検定できると見ていた。
- ・資料集のP10の「alko」を登録（インストール）しない理由について。「アプリの登録（インストール）に慣れていない人が見受けられる。クロス集計からは運動の回数が多い人が慣れていないことがわかった。また、類似アプリで歩数を確認しているという回答もあった。どのような背景があるか、感じられることがあれば教えていただきたい。

○事務局

- ・運動の回数が多い人の中に高齢者が多いことが影響していると思われる。アクティブな方がこのアンケートの回答者となっており、高齢者でアプリの登録をされてない人はもう少し多いのではないか。また、LINEで回答するアンケートの結果なので、見ていない人は回答していないことにも注意が必要だと思う。

○伊藤大介委員

- ・iPhoneには最初から歩数計測アプリが入っているので、それを利用して alko を利用していないという事情もあるかもしれない。

○関委員

- ・例えば若年層に健康活動を促す際、活動に参加する時間がないため本人の成功体験がなく、ハードルが高いかもしれない。代理体験のような、自分と同じ境遇の人が参加した結果や効果を知ることが入り口となるかもしれない。若年層に向けた、運動や地域活動を通じた楽しみや経験を通じた啓発の切り口も必要だと思う。

○柴田会長

- ・事務局には、若年層に向けた観点を考えてもらえたらと思う。
- ・健康度について少し注意して考えた方がよいのか。

○伊藤大介委員

- ・〇〇だから健康、健康だから〇〇という関連性は、どちらを見ているか定かではないので、データを注意して見た方がよいと思う。
- ・LINEに回答する人はアクティブだという話が出たように、こういった情報に関心を持ち「参加したくない」と言いながらも回答してくれる人たちのこともふまえた方が良さそうである。

○柴田会長

- ・統計について、原因と結果の因果関係には慎重に考えたい。

○田中委員

- ・資料集 P19 を見て、世話役に対する負担感はどこにあるのかを考えた。前回から出ている、承認要求が高く、自分自身を認めてもらいたいことに驚いた。
- ・P21の「サロンの世話役としての活動の中で負担が大きいと思うこと」について、サロンへ新しい人が入らないこと、後継者の発掘や育成につながっていない。これから計画に盛り込むにあたり、新しい人をどのように引き付けるか、今の人たちをどう認めて伸ばしていくかも必要だと思った。ただし、年配者が多いので機会は限られる。具体的な案を出しながら取り組むべきである。

○柴田会長

- ・同じ負担感でも、町内会のような地縁団体によるものとサロンのような自発的なものには違いがある。サロンは社協による交流会などのサポートもある。負担感をひとくくりにするのではなく、丁寧に考えていくことが必要になると思う。

○伊藤博美委員

- ・調査結果の概要を見て、みなさんの alko に対する要求が高いと思った。おそらく、ほかのアプリにある機能を知っているので alko にもあるとよいと考えているのだろう。もともと alko は運動していない人に向けて始まったものである。そこにエクササイズなどを盛り込むと、当初の目的から外れていく。行政の役割は、運動をしていない人に広げることであろう。
- ・サロンがクローズドになっていて、参加するハードルが高い。最初の入りやすいところにインセンティブを持たせてはどうか。ずっと募集したままでは意味がない。

○柴田会長

- ・今の意見は、制度としてどこまで行かうかの議論の整理に役立つような気がする。
- ・新しい人は、地域包括支援センターから紹介されるパターン以外に思いつかない。田中委員、既存のサロンに新しい人が来る状況はどのようなものか。

○田中委員

- ・既存のサロンに途中から参加するのは、なかなか難しい。既存団体に入るハードルは、我々の想像以上にとっても高い。ただ、仲介者が丁寧にコーディネートをすることでつながったケースもある。丁寧なかかわりが必要だと関委員とも話していたところである。

○柴田会長

- ・孤立気味の人には心理的な壁を作ってしまう、入りにくいこともあるだろう。地域包括支援センターなどから、サロンへの参加の背中を押すことも必要かもしれない。

○伊藤大介委員

- ・資料集 P9 の「alko の機能で魅力的に感じるもの」を見ると、健康ポイントのチャレンジ企画はどの世代でも関心がみられた。新しいものに参加するきっかけを求めているのではないか。
- ・サロンや地域貢献も同様で、入り口がわからない、既存の人達の輪に入れるかの不安も大きいだろう。alko のチャレンジ企画のようなものが、支え合いポイントでも考えられないか。
- ・健康ポイント交換申請者の居住地区について、特定地域に集中しているか市内で分散しているか。健康行動は周囲の物理的環境に左右されるので、特徴があるなら地域ごとにアプローチを変えることも必要かもしれない。

○市長

- ・概ね人口規模と同様で、分散していると言える。

○加藤委員

- ・ alko の効果は、LINE アンケートの回答者との親和性が高いと感じた。alko で歩くことができているのは前向きにとらえた方がよい。
- ・ サロンは、どうしてもスタート当初からの人、知り合い、身内だけで開催する傾向があるので、新しい人が参加しやすい具体的な方法を助言している。新たな参加者にとって、選択肢はたくさんあった方がよい。
- ・ サロンは、デリケートなのでいろいろな場がある方がよい。喫茶店を会場にしているサロンは人気があり、そこから社協につないでいる。行政が考えるサロンだけが居場所ではないという認識を持った方がよい。だれがどういうマインドで開いているのかが重要である。

○柴田会長

- ・ サロン以外のネットワークも大事である。

○市長

- ・ 世話役について、期限の有無にも留意する必要がある。区長については1年交替が増えてきている。地域のことかわかった、知り合いが増えたという声は、任期が終わるからという前提がある。任期がないと、いつまでやらなければいけないかという不安がある。
- ・ サロンについて、メンバーが固定化されるケース、広がっていかないケースも多い。そういうこともあるので、サロンは1つの区に1つと限らず、近くにいくつかあって、選択できるとよいだろう。

(3) 施策の展開に向けて

・ **論点1 取り組む人を増やすために**

○柴田会長

- ・ どの課題も、短期的に解決できるというというものではないだろう。
- ・ この論点は、中長期的な課題であり、ここを掘り下げるとは難しい面がある。

○関委員

- ・ ボランティアマッチングデイやボランティア体験会等の活動をする中で、団体とボランティア希望者の橋渡しをしている。きっかけを持った人をそのままにせず、活動の提案やコーディネートをしていきたい。

○柴田会長

- ・ ボランティアについては、新型コロナウイルス感染症で警戒が強く、なくなった学生サークルもあると聞いている。小牧市では回復に向かっているか。

○田中委員

- ・第7波前後から自分たちでできることから、活動再開の動きが出てきている。ただ、中には活動が終了してしまった団体もある。
- ・ボランティア活動が様変わってきており、時間や機会があれば参加してもよいという人が増えてきている。このような人たちの参加を得るために、いろいろなプラットフォームを設けていく必要がある。
- ・コロナ禍前は、LINEでボランティアマッチングに取り組んでみた。当時、LINEはそこまで活用されていなかったが、今のマッチング状況はどうだろうか。

○関委員

- ・LINEは情報提供が主となっている。情報を見て団体に直接行くのはハードルが高い。
- ・ワクティブに参加している人の次のステップとして、団体を紹介している。コーディネーターの意義は大きい。

○田中委員

- ・災害ボランティアでは、ポスターに書かれた活動メニューに自分の名前を付箋に書いて貼るというマッチングをしている。これは参加する方には安易ではあるが、コーディネーターが欠かせない。

○柴田会長

- ・これまで社会福祉協議会は福祉講座を開いてグループを作っていくという方法で、メンバーの募集を行ってきた。グループを作るだけでなく、いろいろなプラットフォームを作って可視化するという方法への転換期に来ているかもしれない。

○市長

- ・お試しや体験という視点が重要になっているだろう。参加すると団体に入らなければならないというイメージがあり、気軽にできる機会の提供が必要である。多様な価値観で忙しい中、縛られることなく、参加したいときに参加するという視点が、すそ野を広げるのに大きいと思う。

○加藤委員

- ・musbunは学生の福祉体験ボランティアのマッチングをしている。社会的起業とし、プラットフォームの運営者がそこで就労している事例がある。今回この方法がフィットするわけではないが、プラットフォームとして親和性が高く、マネタイズもできる。今のつなぎ方、個人単位で空いた時間に単位で活動するしくみができるとうよい。選べる手段が多いほどアプローチの精度が上がってくるので、それを若い人や企業と一緒に考える必要があるだろう。

- ・ある自治体でパートナーシップ研修をしている。地域・市民活動団体・企業など複数の場でのフィールドワークを入れて、活動現場でお手伝いをする体験を組み込んでいる。現場を知らないと要望も分からない。プラットフォームと現場のそれぞれを理解し、コーディネートをしていくことが大切である。
- ・発信者として育てること、担い手側が体験する機会も設けないといけない。また、オンラインとオフラインの両方を一緒に進めることが重要である。

○伊藤博美委員

- ・1回だけの参加でも大丈夫と示すこと、また、団体の連絡先については担当者名を記載した方がハードルは下がるだろう。
- ・体験会をしていることをLINEで告知できるとよい。新人募集でなく、まずは体験からにするとハードルが下がる。
- ・健診は1年に1回の健康づくりの働きかけのチャンスである。子育て世代など、忙しい人も健診時に、健康に向かい合う。
- ・40～50歳代へのアプローチが重要である。親の介護までは時間があり、子どもが手を離れてくる。自分の健康、親の健康に視線が向いている世代である。

○伊藤大介委員

- ・小中学生が学んで、おじいちゃんやおばあちゃんを誘うという方法もあろう。小中学生については、ボランティアを暮らしの中で身に着けて、ボランティアの土壌づくりにつながっていけばと思う。

○柴田会長

- ・小牧市はジュニア奉仕団の活動が活発である。そこを活かす方法を考えられたらと思う。

・論点2 ポイント制度の活用

○関委員

- ・市民活動団体が継続していくことが難しいところがあり、ポイント制度が活用できないか。例えば、公益な活動をしている団体へのポイントの付与で団体の継続や会員の確保を図ることなどが考えられる。
- ・入口を広くするために、個人へのポイントが趣旨であると考えているが、支え合いポイントをサロンの旗を立てるだけで申請する方がいる。ポイントを取得することが目的になっていて、もったいないと思う。

○柴田会長

- ・ハードルを下げるときに、きちんと理解してもらおうということであろう。

○田中委員

- ・ジュニア奉仕団について、中学生への福祉教育の観点もあり、最初からポイントを付けるのは大事なところを見失うのではないかと危惧している。

○伊藤大介委員

- ・例えば、活動や付与する時期を限定する、活動量に比べてポイントの付与は低くするなどの工夫をすることができるのではないか。ただ、その前段階として、本来の目的を学校教育や福祉教育で十分に伝えることとセットで行うことだと思った。
- ・ハッとすぐ意見である。目的をふまえて、ポイントを付与する必要がある。

○伊藤博美委員

- ・ポイントを自分に使わずに、近所のおじいちゃんに団体など誰かにあげるしくみはいかがだろうか。たくさん獲得することで達成感を得られ、それが循環になる。

○市長

- ・現在のポイント制度はきっかけづくりであり、手弁当で足代・お茶代も自費負担している方への気持ちである。
- ・対価、ポイント制度だけではなく、表彰や感謝状をはじめ、ほめる機会も重要と思っている。
- ・活動してきた証明としての顕彰も考えたい。

○柴田会長

- ・ジュニア奉仕団については、中学校や教育委員会との協議が必要であろうが、自分のためだけではないという考え方は安心できると思われる。

○伊藤大介委員

- ・ポイントは、ボランティアを受ける側にもメリットがある。受ける側にとっては、一方的にしてもらうことが心理的負債になる。それが、してくれた生徒のポイントになるなら受けやすくなる。ただし、周知や理解の仕方、見せ方に留意しなくてはいけない。

○柴田会長

- ・介護保険制度以前、住民参加型在宅福祉サービスという有償の活動があった。これもボランティアでは受ける側に心理的負担があるということで、有償になった経緯がある。自分のためではなく地域のためになっている。
- ・高齢者だけでなく子育てサロンも大事である。

○市長

- ・居場所づくりについて。子ども食堂が話題になったように、高齢者向けの食堂も必要かもしれない。外出支援や食事を共にすることも重要である。
- ・いろいろな形態・目的のサロンがあるとよい。人と会える、相談できる、孤独にならない場が重要。

○加藤委員

- ・ポイント、表彰について。バッジ（デジタル）を得る、コンプリートしたいという理由で、歩いている人はいるだろう。
- ・自分では使えないが他の人に寄付できる、運用できる仕組みにする。ポイントではなくバッジにする、ステージが上がっていくなどの工夫が考えられる。
- ・alko のチャレンジ企画の支え合い版として、例えばどこかの企業等とタイアップして「〇〇地区の見守り」を手伝うと期間限定でポイント3倍などというPRは訴求力があると思う。支え合いは分かりにくい、何かもらえるポイントが付くことがあってもよいのでは。
- ・やらなければいけないでなく、自分たちが面白い、やりたいというスイッチが入る瞬間を仕掛けていくことを考えてはいかがだろうか。教育という視点はなかなかハードルが高いが、活動する中で目的がだんだんわかっていくというアプローチでもよいと思う。

○市長

- ・非常に素晴らしいアイデアである。
- ・団体については、活動内容によって補助や支援に段階を設けていくということはあるだろう。
- ・個人については、顕彰・ポイントなどを組み合わせる中で個人の頑張りがバッジやステージ制などで見えると、励みになる。換金性はなくても、コンプリートしたいという要望はあるかもしれない。そういう制度は面白く、可能性としては十分ありそうだ。前向きに考えたい。

○加藤委員

- ・ネーミングが大切である。あまり関心のない人や初めて活動する人に「ボランティア」「市民活動」「福祉」という言葉は届かないだろう。「健康・支え合いの循環」もわかりづらい。
- ・環境美化であれば、「ごみトレジャーハンター」ぐらいまで柔らかくすると、ゲーム感覚で取り組めそうである。
- ・ネーミングや自分の好きなことが、地域や人の役に立つことへのつながりを見せるのが、コーディネーターの役割。ここでスイッチが入れば、自分事だと感じる人が増える。それが、伊藤大介委員の言うように子どもも巻き込むアプローチにもなる。

○柴田会長

- ・今日も貴重な意見をいただき、感謝申し上げます。事務局には、次回のまとめで議論してほしい。では、進行を事務局に返したい。

3. 連絡事項

- ・第4回の会議は3月20日（月）14:00から、3階301会議室で開催予定である。一部、オンライン参加の委員がいるのでご承知おき願いたい。
- ・本日は長時間にわたり、貴重な意見を頂戴し感謝申し上げます。本日の会議録については、作成次第、送付するので内容の確認をお願いしたい。
- ・以上で第3回推進会議を終了とする。

以上

（了）